



古典芸能研究センターからの お知らせ



古典芸能研究センターリニューアル記念講演 「古典芸能研究の未来」



舞楽「蘭陵王」

中世芸能の視点から、「能の解釈史—高砂・敦盛二題」と題し、婚礼の席で「高砂」の島台が飾られるなど、日本人にとってもっとも馴染み深い能「高砂」を中心に、中世から現代にいたるまで、能の作品解釈がどのように行われてきたのか、その変遷をたどりました。

神戸女子大学名誉教授 阪口 弘之特別客員研究員は、近世芸能の視点から、



神戸女子大学名誉教授
阪口弘之特別客員研究員

「作者と編者—『かしま御本地』を事例に」と題して、作者によって生み出された浄瑠璃作品のテキストが、編者(本屋)を介することでいかなる変遷を遂げるか、実例を示しながら解き明かしました。

神戸女子大学教授 大谷 節子兼任研究員は、

神戸女子大学教授 川森 博司古典芸能研究センター長は、民俗芸能の視点から、「来訪神儀礼と「はじまりの芸能」」と題し、人の心にやすらいをもたらすしなやかな力のある古典芸能の背景として民俗芸能や沖縄祭祀を位置付け、来訪神(別世界から訪れる神)を例に挙げて紹介しました。

講演会終了後は、来場者に、展示室で同時開催した「リニューアル記念展示」を非常勤研究員の解説によって見学していただきました。その際、貴重な能楽資料をセンターにご寄贈下さった手塚 稔子氏と伊藤 博氏へ中島 實学長より感謝状を贈呈しました。



神戸女子大学教授
大谷節子兼任研究員



神戸女子大学教授
川森博司古典芸能研究センター長



講演の様子



手塚稔子氏



中島實学長と伊藤博氏

写真展「沖縄の祭祀1978-2013」

平成26年8月27日(水)から11月19日(水)の期間、展示室で写真展「沖縄の祭祀1978-2013」を開催し、センターがWeb公開している「沖縄祭祀資料データベース」に収録された祭りを紹介しました。このコレクションは、センターが所蔵する沖縄の祭りの写真8,000枚あまりとその調査資料が中心です。センターでは、現在も現地での追跡調査と資料収集を継続することで補足と充実をはかり、データベースの更新を行っています。そこで、今回は、平成19年度にデータベース公開を記念して開催した展示を基に、こうした最近の成果を新たに加えて展示しました。



国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」

古典芸能研究センターでは、研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」の一環として、平成26年11月29日(土)・30日(日)、ポートアイランドキャンパスにおいて、「見つめる能面・能面を見つめる」と題する国際研究集会を開催しました。



国際研究集会1日目:狂言「三番三 鈴の段」

国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」

日時:平成26年11月29日(土) 13時~17時・30日(日)10時半~17時

場所:ポートアイランドキャンパス B館403(AVホール)

主催:神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト

「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

(平成25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択(研究観点

「研究拠点を形成する研究」)



国際研究集会2日目:シンポジウム

◆11月29日(土) 国際的に多様な視点から能・狂言面を考察する

【狂言】「三番三鈴の段」三番三 茂山七五三、千歳 茂山宗彦、笛 斉藤敦、小鼓 清水皓祐、大鼓 山本哲也

【講演】能面研究の射程 大谷 節子(神戸女子大学教授・研究プロジェクト代表)

韓国の仮面と仮面劇 李 応寿(世宗大学校教授)

中国の仮面と仮面劇 廣田 律子(神奈川大学教授)

ヨーロッパの仮面と仮面劇 Peter W.Marx(ケルン大学演劇学研究所所長)[※]

[※]ピーター・マルクス教授は体調不良で来日がかなわず、当日は本学国際交流推進部長 海老 久人教授が予め頂戴していた講演原稿の日本語訳を代読しました。

◆11月30日(日) 学際的に多様な視点から能・狂言面を分析する

【講演】能面のような人-宗教学の視点から見る能面- 山折 哲雄(宗教学者・国際日本文化研究センター元所長)

【シンポジウム】「能面を科学する」司会 天野 文雄(京都造形芸術大学舞台芸術センター所長・古典芸能研究センター客員研究員)

研究報告

人類学の視点から見る仮面

吉田 憲司(国立民族学博物館教授)

民俗芸能の視点から見る仮面

宮本 圭造(法政大学能楽研究所教授・古典芸能研究センター客員研究員)

美術史の視点から見る能・狂言面

根立 研介(京都大学大学院文学研究科教授)

材料科学の視点から見る能・狂言面

高妻 洋成(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長)

演者の視点から見る能面

金剛 永謹(能楽シテ方金剛流宗家)

討論者

Julie A.Iezzi(ハワイ大学教授・古典芸能研究センター客員研究員) 竹本 幹夫(早稲田大学文学学術院教授)

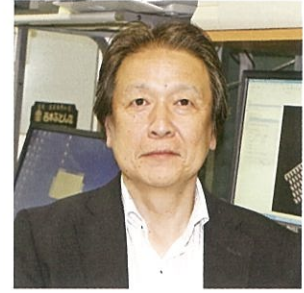
Stephen Marvin(能面収集家) 杉山 淳司(京大大学生存圏研究所教授) Monica Bethe(中世日本研究所所長)

川森 博司(神戸女子大学教授・古典芸能研究センター長) 大谷 節子(神戸女子大学教授・研究プロジェクト代表)

科学研究費助成事業に採択された研究紹介

セルロースの食品実用化に向けて

神戸女子大学大学院家政学研究科 研究科長 山根 千弘 教授



作成した再生セルロースフィルムの評価をゼミ生と行う山根千弘教授

セルロースはレーヨンやキュプラなどの再生繊維、セロファンやスポンジなどに広く使われています。セルロースは植物の細胞壁の主成分なので、本来可食性のものなのですが、前述の製品は食べることは出来ません。食感的に無理なこともあります。これらの製造過程において二硫化炭素や銅アンモニアなど食品の加工には使ってはいけない化学物質が用いられているからです。

一方、我々の研究グループはセルロースを水酸化ナトリウム水溶液に溶解することに成功しました。水酸化ナトリウムは食品の加工に使っても良いものです(ただし得られた食品

に残留してはいけない)。したがって、これにより初めて、再生セルロースを食品に展開することが可能になりました。とはいえセルロースは結晶性の高分子なのでとても硬く、いくら法律的に食べてよくても、食感的にとっても食べられたものではありませんでした。そこで、まずセルロース溶液から再生セルロースが析出する過程を、コンピュータシミュレーションや兵庫県にある世界で最も強力な高輝度放射光施設SPring-8などを使って検討してきました。セルロースの構造形成メカニズムを理解することが構造の制御に重要と考えたからです。そして構造形成過程において、疎水性の相互作用で集合した分子シートの形成を抑制すれば、結晶性の低い、すなわち良好な食感の再生セルロースが得られることを見出しました。このような研究をベースに、まず日本人が大好きな麺をつくることができました。食感をさらに良くするためにコンニャクグルコマンナンを混合しているのでカロリーゼロではありませんが、100gあたりわずか6kcalしかありません。加えて、茹でても麺がのびないという特徴もあります。またこれは食物繊維なので、急激な血糖値の上昇を抑えたり、経口的に摂取された変異原性物質を吸着して排出したりする効果もあります。ダイエットだけでなく、成人病の治療や食の安全にも貢献できるかもしれません。



セルロースの構造をコンピュータシミュレーションするゼミ生を指導する山根千弘教授

山根千弘教授の科学研究費助成事業に採択された研究課題

平成17～19年度 基盤研究B「セルロース/水酸化ナトリウム水溶液からの新機能性食品材料」

平成23～26年度 基盤研究C「ナノ食品—木質パルプから構造制御されて得た機能性食品材料—」

企業とコラボ・・・「無敵の白シャツ」完成！通信販売に登場

神戸女子大学家政学部 家政学科の「生活プロジェクト演習Ⅲ」(担当:大森 正子准教授、中西 正恵教授)の授業では、生活に関わる実践的なプロジェクトを企画し実行することで必要な知識と技術を身につけていきます。

平成25年度後期に初めて開講された「生活プロジェクト演習Ⅲ」の授業で、3年生の受講生が株式会社フェリシモと共同で女子学生の就職活動を応援するためのシャツを開発し、平成26年8月から通信販売の受注が開始されました。

働く女性を応援するために同社が既に開発した手入れしやすいカットソーシャツをもとに、就職活動に役立つ白シャツを現役の女子学生と一緒に作りたいという同社から

のご提案で共同企画が始まりました。企業主催の説明会や採用面接に、学生はスーツで臨むことが多く、シャツのデザインは、定番どおりで堅苦しいものが多いのが実情です。学生たちは、おしゃれもしたい、個性も出したいという気持ちを満たし、就職活動以外でも着ることができるシャツを考えました。

完成したシャツは、カットソーのメリットがあり、着用時にはきちんとした印象を周りに与え、おしゃれで自分らしさも表現できるなどのコンセプトが盛り込まれています。「フェミニン」「クール」「エレガント」と3つのテイストのシャツが完成しました。名づけて「無敵の白シャツ」の誕生です。このシャツは、仕事をもつ女性にも高く評価されています。



株式会社フェリシモの社員2名(中央)の指導を受けながら、企画を練る学生たち



中西正恵教授(前列左)、大森正子准教授(前列右)、清瀬美紀助手(後列左)と一緒に完成したシャツを持って記念撮影



須磨・ポートアイランド両キャンパスでも発売しています

お弁当開発 続行中!

神戸女子大学家政学部 管理栄養士養成課程の後藤昌弘教授(専門:調理科学)のゼミでは、昨年度から「自分の大切な人に食べてもらいたい健康に気遣ったお弁当」をテーマにコープこうべ関連会社の株式会社コープフーズと大塚食品株式会社のご協力のもと、実際の商品開発に取り組む体験学習を行っています。平成25年度に三つのお弁当を開発した先輩に続き、平成26年度のゼミ生も学んでいる栄養学の知識を生かしたお弁当を考えています。

第4弾のお弁当は、食欲の落ちる夏に必要な栄養素を摂取でき、疲労回復の効果のある酢酸やクエン酸が含まれる黒酢のあんをかけた白身魚を主菜に、ビタミンCやβ-カロ

テンを含む10種類の野菜などが入っています。

第5弾はおふくろの味として人気の「肉じゃが」を主菜とし、野菜を15種類含めた合計30品目を使ったお弁当を考えました。

主食のご飯は大塚食品株式会社の「マンナンヒカリ」を使用し、カロリーは控えめで、栄養を考え季節を感じるお弁当を考案しました。

材料の原価計算や工場での製造工程を考えたレシピ作りなどでコープフーズの皆様にご助言、ご協力をいただき、学内の実習ではできない様々な経験ができました。今春には第6弾のお弁当を発売します。



後藤昌弘教授とゼミ生



平成26年度に販売されたお弁当

第4弾「～暑さに負けるな!～『10種野菜の黒酢あん弁当』」(左)
(513kcal) 7月21日(月)～10月19日(日) 販売

第5弾「たっぷり30品目おふくろの味弁当」(右)
(497kcal) 10月20日(月)～1月18日(日) 販売

*第1弾「かつんと贅沢25品目牛丼弁当」は好評につき現在もコープこうべで発売中



国際交流

交流年表

(姉妹提携等)

1983年	ハワイ大学(米国)	2010年	ウダヤナ大学(インドネシア)
1993年	ケント大学(英国)	2010年	西安工程大学(中国)
1997年	フライブルク大学(独国)	2010年	カセサート大学(タイ)
2000年	華南師範大学(中国)	2010年	高麗大学(韓国)
2006年	ガジャマダ大学(インドネシア)	2011年	チェンマイ大学(タイ)
2006年	オークランド工科大学(ニュージーランド)	2011年	カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校(米国)
2006年	ピッツァー大学(米国)	2012年	アイルランガ大学(インドネシア)
2007年	チェンドラワシ大学(インドネシア)	2014年	静宜大学(台湾)

チェンマイ大学との交流

2014年7月14日(月)から18日(金)の間、タイのチェンマイ大学からカリム・フセイン(Karim Hussain)氏とパリヤポーン・スパモンナコル(Pariyaporn Supamongkol)氏が、神戸女子大学の須磨キャンパスを訪れ、文学部神戸国際教養学科の学生に、特別講義とタイ語及び英語のレッスンを行いました。同学科の学生で、8名がチェンマイ大学、1名がカセサート大学へ留学を予定しており、そのサポートにもなりました。

フセイン氏による特別講義は、17日(木)3時限目と4時限目に開催され、講義は全て英語で行われました。

3時限目は「国際協力・援助政策論」(担当:野口 和美准教授)の授業で、2年生35名が受講しました。最初に学生たちは、タイについて知っていることを順番にホワイトボードに書き出し説明しました。それを踏まえてフセイン氏はタイの文化や習慣を紹介し、外国からの観光客の状況、ASEAN(アセアン)の加盟国について講義しました。続いて学生たちは、順番に現在のアジアの国際状況のイメージをホワイトボードに書き、

感じている事を発表しました。最後はグループに分かれて、ASEAN 10ヶ国の知識を試すカードの分類ゲームで、楽しみながらASEAN諸国の知識を深めることができました。

4時限目の「グローバル・ローカル専門演習I」(3年生ゼミ)の授業では、アン・ケーリ教授と野口准教授のゼミ生24名が合同で受講しました。始めにフセイン氏は自身の家族やルーツを紹介し、続いて3名の学生が自分の家族や出身地の紹介をしました。この後、国内外の学校の中で起こっている問題をとりあげ、国境を越えた人と人とのふれあいについて考え、各自がグローバルな視点をもつように心がけて意見を述べました。

学生たちは、特別講義を受講してタイを含めたASEAN諸国に興味をもち自分もアジアの一員であると自覚し、広い視野をもつことの大切さを学びました。

特別講義終了後、フセイン氏とスパモンナコル氏は、学長室を訪れて中島 實学長にチェンマイ大学との交流についての感謝の意を伝えるとともに記念品を贈呈しました。



チェンマイ大学カリム・フセイン氏



フセイン氏の講義の様子



中島實学長を表敬訪問したフセイン氏とスパモンナコル氏(前列右)、後列は左から安原順子教授、海老久人教授、野口和美准教授、アン・ケーリ教授

静宜大学と友好交流協定を締結

2014年8月7日に神戸女子大学と台湾の静宜大学は、両大学の学生と教員の学術、文化交流の発展、および大学の国際化の促進を目的として友好交流に関する協定を結びました。台湾で中国語を学習できる機会を学生らが大きに活用することが期待されます。

友好協定の締結にあわせて国際事務顧問である日本語学科の曾 煥棋先生が須磨キャンパスを訪問されました。

神戸国際教養学科では、2015年度から静宜大学におけるオフ・キャンパス・プログラムの実施を予定しています。今回の訪問では、国際交流推進委員会の関係教員とプログラム内容や今後の交流についての意見交換と、中島 實学長との面談が行われました。神戸国際教養学科の教員との交流の機会もあり、オフ・キャンパス・プログラムの円滑な実施が期待されます。



須磨キャンパス・ライブラリー・commonsで今後の交流計画を相談後に記念撮影
曾煥棋先生(中央)と国際交流推進委員
(左から安原順子教授、王霜嬌教授、海老久人教授、野口和美准教授、国際交流推進事務室の奥野なつき課員)

日本ヘモレオロジー学会国際合同シンポジウム 神戸女子大学参加報告

2014年8月23日・24日に、日本・インドネシア国際合同シンポジウムがインドネシアの国立ウダヤナ大学(バリ島)で開催されました。ウダヤナ大学医学部内分泌・老年科、日本ヘモレオロジー学会、神戸女子大学が共同で開催したシンポジウムには、それぞれの大学の教員や大学院生、学会に所属する研究者などによる最新の研究成果が発表され、今後の健康、栄養、社会福祉学及び老年学(臨床医学)におけるヘモレオロジーの研究分野を牽引していく機会のひとつとなりました。

本学園及び学会からの参加者はその同行者、研修学生や取材陣も入れると総勢50人にも及びました。さらに、本学と教育研究交流提携MOUを交わしているウダヤナ大学スアスティカ学長から本学園行吉 誠之理事長にこの記念すべき合同シンポジウムへの特別招待があり、行吉理事長は荣誉ある開会ゴングを打ち鳴らし、開会宣言を行いました。そして、ウダヤナ大学側から記念品として、老年シンポジウムに相応しい絵画が理事長にプレゼントされました。

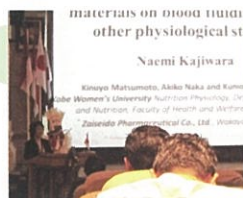
神戸女子大学健康福祉学部の学部長 梶原 苗美教授による基調講演、同学部の教員の口頭発表が行われ、研究のポスター発表には、教員に加えて大学院生も参加しました。今回の合同シンポジウムは、健康福祉学部の「国際健康福祉プログラム」にも組込まれ、履修した12名の学生は、国際シンポジウム参加やウダヤナ大学医学部の学生との交流など貴重な体験もしました。発表者全員に参加証明(Symposium Certificate:Dr.トゥテイ医学部教育病院長、横川 晃治日本ヘモレオロジー学会理事長、梶原学部長署名)が発行されました。



開会宣言を行う行吉誠之理事長



ウダヤナ大学から寄贈された絵画

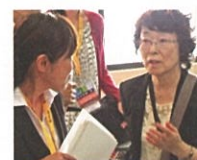


基調講演中の梶原苗美教授

健康福祉学部 学部長 梶原 苗美教授による基調講演

梶原 苗美教授は23日に基調講演「Studies on the effects of herbal materials on blood fluidities and other physiological status」(「漢方生薬による血流の改善作用に関する研究」)を行いました。

概要:「冷え」に有効とされる漢方(四物湯、十全大補湯、七物降下湯)及びその成分である生薬(当帰、川芎、芍薬、地黄、釣藤鈎等)を疾病モデル動物に与え、血液流動性への影響を観察した。その結果、血液流動性の亢進や脂質代謝の改善効果等が証明された。



会場で打ち合わせ中の梶原苗美教授

健康福祉学部 吉川 豊教授 プレゼンテーション賞受賞

健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科の吉川 豊教授は「Study of zinc compounds with lifestyle-related disease therapeutic effect」(「亜鉛化合物が生活習慣病の治療に及ぼす効果」)というテーマでプレゼンテーションを行い、今回のシンポジウムの中で特に優れた研究に贈られるプレゼンテーション賞を受賞しました。

概要:生活習慣病の中でも完全な回復が難しい、糖尿病や高血圧状態の動物に、亜鉛化合物を与えた結果、高血糖や高血圧状態を改善することを証明した。最近の研究で合成に成功した新しい亜鉛化合物は、過去の亜鉛化合物より、糖尿病治療効果に優れており、高血圧の改善効果も示した。今後、安全性の問題がクリアになれば、上記亜鉛化合物の臨床への応用も期待できる。



帰国後、賞状を学部長の梶原教授から手渡される吉川豊教授



口頭発表

教員:鈴木 一永教授(健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科)
吉川 豊教授(同上)
松本 衣代助教(同上)

ポスター発表

教員:安原 順子教授(文学部 日本語日本文学科)
横山 正子教授(健康福祉学部 社会福祉学科)
清水 弥生准教授(同上)
木村 あい准教授(同上)
重福 京子准教授(健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科)
坂元 美子准教授(同上)
大学院生:川崎 朝子、仲 亜紀子、末長 佳奈(家政学研究科 食物栄養学専攻)

本学からの発表者

日本ヘモレオロジー学会

ヘモレオロジー(【hemorheology】血管内の血液の流動について研究する学問)およびその隣接する分野と栄養・運動・健康の基礎から応用に至る研究の発展を図り国際臨床ヘモレオロジー学会と連絡を保ちながら広く知識の交流を求めることを目的として設立。栄養、食品学、運動生理・スポーツ学、医学、物理・生物学などの様々な分野の研究者が会員。